

道

2022・11・2

通信 No 1707



アノダ

《今日の練習 6時～8時半》 清水先生 小坂先生
・アメージンググレース ・イマジン ・群青 ・大地讃頌

《11月9日の練習 6時～8時半》 小坂先生 二宮先生
・希望の大地（3部全曲持参）

吉野町プラザホール

11月20日（日）午後1時～5時 市従会館4階

11月23日（水）午後6時～8時半 フォーラム南太田
地図等、ご案内は後日道通信で行います。

《子守歌をせがむ猫》

「道」に入る前まで、3年ほど加わっていた合唱サークルがあり、家でも週に1～2回、発声と歌練習をした。合唱は半世紀以上もしていなかったの、落ちこぼれないためだ。

当時、家に2匹の兄弟猫がいた。か細い声のミイと大きな声のクロ。クロの方は、日中は毎日近くの山で「狩り」を楽しんでいたため、その練習を聴いたことが無かった。家に居ることの多かったミイは、練習を始めると、「爺はこれさえ無ければ良いのだが」とばかり、耳をペタンコに閉じ、そそくさと出ていっていた。2年半前、そのミイが逝った。その年の秋も深まり、コタツを建てた頃、クロはもう日中の狩りを止め、家に居るようになっていた。

「発声練習」を始めた。クロがコタツから出てきた。「あっ、クロもミイと同じだな」と思いきや、真ん前に「正座」し、正面から私を見上げる。「えっ?! 嫌じゃないの?」ならば、と構わず練習を続ける。すると今度は真横に並び、私の喉の辺りをしげしげと見上げる。

そんなクロの「練習観察」が2回ほどあった後のこと、いつものように昼食後の昼寝をリクライニング椅子でしようとしたら、クロがお腹に乗ってきた。そこまでは良い。

が、クロはどんどん首の辺りまで上ってきて、私の喉を前足で強く押す。

「ちょっと、何やってんの、そんなとこ押したら苦しいでしょ」手で前足をどけるが、またすぐ押す。「えっ? まさか、歌えて言うこと?」半信半疑のまま、「七つの子」〔カラスなぜ鳴くの〕を小声で歌う。満足げ。二番まで歌って寝ようとしたらまた喉を押す。「あのね、それじゃ爺が寝られないでしょ」。仕方なく「夕焼け小焼け」を歌う。終わるとまた喉を押す。「なんか、喉を押せば歌が出る仕掛け人形と勘違いしてない?」じゃあこれなら寝るかなと、讚美歌 312番「いつくしみ深き」を三番まで全部。これでほとんど寝かかったのに、頭を上げ、「もう少し」と眠い目で催促。これでどうだ、と「ゆりかごのうた」〔ゆりかごの歌をカナリヤが歌うよ〕を、これも四番まで全部。完全にぐっすり寝込む。私も寝る。以来、昼寝時には私の上でこの4曲すべてを聴いて寝るのがクロの日課となった。

そのクロも、今年5月22日、17歳で「いやあー、世話になったなあ、サア逝くぞー」とばかり、堂々と逝った。なんとも特別な猫だった。

「クロ猫の爺」バス奈倉哲三